



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	人々をつなぐイベントの創出 : 北大ピア・サポート企画「本活」の報告を通して
Author(s)	平, 侑子; 岡本, 健
Description	3. 人々をつなぐイベントの創出 : 北大ピア・サポート企画「本活」の報告
Relation	北海道大学ピア・サポート活動報告書 (平成22年度版) pp. 27-51
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45443
Type	report
File Information	03.pdf



3. 人々をつなぐイベントの創出

北大ピア・サポート企画「本活」の報告

3. 人々をつなぐイベントの創出

北大ピア・サポート企画「本活」の報告を通して

平侑子¹・岡本健²

3. 1. イベント「本活」の概要

ピア・サポートでは学生生活活性化のための企画として、平成 22 年度から、イベント「本活」を行っている。本活とは、学生が不要になった本を回収し、その本を配布することを通して、後輩に向けた「学術的引き継ぎ」を創出するイベントである。本イベントは、組織されて間もない我々が、イベント実施の進め方を学ぶ機会、そして、多くの学生と触れ合う貴重な機会となった。平成 23 年度も本活の実施が決定しており、北大ピア・サポートの活動として定着しつつある。

しかし、本活はピア・サポートが初めて計画する大きなイベントだったこともあり、計画から実施まで試行錯誤が続いたことも事実である。また、平成 23 年度実施の本活についても、平成 22 年度の反省点を生かして、様々な変更点を加えられており、現在進行形で変化を続けているイベントである。学内において、イベントが学生生活の役に立つためにはどういう形で実施すれば良いか、イベントに来る学生とはどのように接すべきか、どのような工夫で人々を呼び込めるかなど、創意工夫を続けているところである。そういった意味で、このイベントは実験的な試みである。そのため、本章では、試行錯誤のプロセスを含めて、どのようにイベント「本活」を構想、実施し、そして、今後どのように展開していくのかについて整理を行い、人々をつなぐイベントをいかに創出するかを考察する。ピア・サポートという、学生中心でありながらもサークルや部活とは趣旨を異にする組織が、大学内という社会において、具体的にどのように物事を進めていくのかというのは、ピア・サポートに取り組む学生メンバーにとって重要な知見であると考えられる。北大ピア・サポートの取組みについて、失敗を含めて記述しておくことで、今後の北大ピア・サポート、および、他大学でこれからピア・サポートに取り組もうとする学生に資することが期待できる。

3. 2. 「本活」実施に至るまで

3. 2. 1. 進学相談会の発案

ピア・サポート内で、学生生活活性化企画が持ち上がったのは、平成 22 年の秋頃である。

¹ 北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻 修士課程

² 同 博士後期課程

当初は、書籍を扱う企画ではなく、高校生に向けた進学説明会を検討していた。「北大生による大学生活のススメ」と題したこの進学説明会は、受験対策や試験制度の説明ではなく、大学生の生活の実態を紹介するものとして計画されていた。そうすることで、高校生に大学生活とはどのようなものかを想像してもらいやすくし、進学に向けてより具体的な期待と希望を持ってもらうことを狙いとした。従来大学が行っていた進学説明会は、当然北海道大学を目指す人々を前提に行われていたが、ピア・サポートが計画した進学説明会では、大学進学を希望する全高校生を対象とした。北大への進学を目指してもらうことを第一の目的とはせず、高校生に大学生活について知ってもらい、日々の勉強や生活に活かしてもらおうとするものであった。開催場所の候補は当初、道内の都市、仙台、東京の3つが挙がっていた。その理由は、北海道に大学進学をする可能性が高いのは、北海道から東北にかけての高校生と、北大東京オフィスがある首都圏の高校生だと考えたからである。最終的には、北海道大学に在籍する道民の数が少ないというデータから、より多くの道民に北海道大学へ興味を持ってもらうために、北海道第二の都市である旭川市を開催場所として決定した。対象は、旭川市を含む上川支庁管内の高校生とした。

計画していた進学説明会では、各学部の説明、サークル活動、留学、インターンシップ、就職活動、ボランティア活動、北大元気プロジェクトの紹介を予定していた。学部の説明はパネルディスカッション形式とし、各学部の学生に説明会実施への協力を仰ぐこととした。留学に関しても、留学経験者をスタッフとして加え、北海道大学から交換留学をする利点について紹介してもらう予定であった。そのため、スタッフの数はピア・サポーターを含めて25人ほどを見込んだ。また、個人相談スペースをイベント開催中常時設けることが計画されたため、会場は旭川市内のホールの中でも計500人を収容できる場所を必要とした。

進学相談会のための広報は、教育委員会経由で上川支庁の高校に呼びかけを行う、管内の大学進学者が多い高校に個別に呼び掛ける、市の広報紙に掲載を依頼する、旭川市の大手予備校に呼び掛ける、北海道新聞やテレビの取材を依頼する、北海道新聞の付録 *ontona* に投稿する、大学のホームページに掲載してもらう、駅にポスターを掲示する、など様々な案が挙がっていた。

進学説明会開催に向けたスケジュールは以下の通りである。実施は2010年3月中旬を予定し、そのために2009年10月から細かな企画を練るつもりであった。特に会場を選択することと、広報活動に関する下準備は十月中から行っており、11月には会場を確定し、ピア・サポーター以外のスタッフへの趣旨説明と協力依頼を行う予定であった。それに合わせて、早々に会計、企画内容、広報などピア・サポーター内でそれぞれの係が決定し、企画書を事務に提出した。10月から3月までのスケジュールを表にまとめた(表1)。

表 1 進学説明会開催に向けた予定

10月	ピア・サポーター以外のスタッフの依頼、説明会の内容企画、予算の計算
11月	ピア・サポーター以外のスタッフの確定、会場確定
12月	広報用チラシ製作、印刷、説明会の内容企画打ち合わせ
1月	旭川市関係者へ依頼、説明会の内容最終確認、管内にポスター掲示
2月	広報用チラシ頒布、
3月	最終打ち合わせ、新聞やテレビへ広報を依頼、中旬に実施

しかし、事務からの返答は、進学相談会の実施は難しいというものであった。その理由としては、以下の2点であった。1点目は、北大の入試を担当するアドミッションセンターの業務と内容が重複する点、2点目は、ピア・サポートは学校の公的な組織であるため、進学相談会内でのピア・サポーターの発言が他組織の主張と違う危険性がある点である。ピア・サポーターは、入試のための説明会ではないことを強調していたが、高校生達が期待するのはどうしても入試の情報になる、という指摘を受けた。また、現在振り返ってみると、初期メンバー（第1期、第2期メンバー）の数で開催するイベントとしては、大がかりであり、実現性が低かったように思える。

このように、ピア・サポートは、12月に入ってから当年度の学生活活性化企画の練り直しを余儀なくされることとなった。この経験は、ピア・サポートが学生のサークル活動とは異なるということを実感するものであり、ピア・サポーターにとって、学ぶべきことが多い体験となった。

3. 2. 2. 企画の仕切り直し

進学相談会の実施が困難になったため、12月上旬から再度、学生活活性化の企画を練ることとなった。実現可能か否か、許可を取れるか否かは考慮に入れず、一度全員でブレーン・ストーミングを行った。どのような活動を行えば北大生にとって充実した学生生活に繋がるのか案を出したところ、以下の表に示すような候補が集まった（表2）。

表 2 学生活活性化企画のブレスト結果

・ 構内にスケート場を造る
・ 構内に温泉（足湯）を造る
・ 古本市をひらく
・ 北大内農場の牛からとれた牛乳を販売する
・ 北大生で大じゃんけん大会を開く
・ 教授陣のミスキャンパスコンテスト
・ オリンピック応援イベント
・ メインストリートで、長い恵方巻を作る

（次頁へ続く）

・ ひな人形を作る
・ 雪像を造る
・ かまくらを造る
・ 大きな焚火をする
・ 焚火で牛を焼く
・ 学部対抗雪合戦
・ 映画を製作する
・ ジンギスカンパーティーを開く

これらの中で、多数決を採ったところ、温泉（足湯）、古本市、恵方巻が最終候補に残り、最終的には古本市を開催することとなった。しかし、ピア・サポートが古本市を行う場合、金銭の授受を行うことは困難である。そのため、本を受け取る際に金銭の代わりに文房具類を渡すこととした。

古本市を開催することが決定し、次にイベントの題名をつけることとなった。インパクトがあり、イベントを的確に表現する題名を考えたところ、以下の表に示した案が挙がった（表3）。

表3 古本市のイベント名称案

・ 本活～本の再活用を促進する会～
・ FF～古本ファンタジー～
・ 古本どうでしょう
・ 本の森
・ 持ち主交代
・ 本の里親探し
・ 古い恋人
・ Book Free
・ 死にそうな本をすくう会
・ 花より古本
・ 教科書冊新会議

この中で、メンバー内の多数決により、古本市のタイトルを「本活」と決定し、サブタイトルとして「～いらなくなった本を必要とする人に渡して本の再活用を促進する会～」とした。

3. 3. 「本活」開催に向けて

3. 3. 1. 開催の目的

企画当初、この古本市の参加対象者は北大生のみでなく、地域住民や北大入学を控える高校生も含まれていた。そのため、開催の目的や期待される成果は、地域の人々との結び付きにも焦点をあてたものであった。以下、当時の提出書類である「学生活性化イベント企画書」を参考に、企画当初の「本活」開催目的を4つにまとめた。

①学術的な引き継ぎを行う

上級生が読んだ本や、上級生が行ってきた学習の仕方を知ることは、下級生にとって有意義な機会となる。しかし、これまで本の引き継ぎは、一部のサークルや研究室で行われているのみであったと考えられる。不要になった教科書を後輩に使ってもらいたい、あるいは、先輩から譲ってもらいたいと考えていても、それを行える場は限られており、実現できない学生が多いことが推測される。本活によって、ピア・サポートがそのパイプ役を担い、間接的に学生同士をつなぐことで、本を通した学術的な引き継ぎを可能とする。

②本への興味・関心を喚起させる

学生にとっては、同じ年代の人々が読んでいる本に興味を持つことも多いはずである。本活では学生から本を集めることで書店とは異なる品揃えを期待でき、より学生にとって興味深い本や、これまで知り得なかった面白い分野の本と出会うことができるであろう。また、専門書は高額であることが多く、文庫本のように気軽に買えるものではない。地域住民にとっても、大学生が使用している学術書を気軽に手に入れてもらうことで、知的好奇心を刺激する良い機会となる。

③ピア・サポートの広報を行う

ピア・サポートは組織されて日が浅く、学生間に十分に認知されているとは言えない。本活のように全ての学生が参加できるイベントを開催することで、ピア・サポート自体の周知に努めたい。本を受け取る際、受け渡す際に積極的にコミュニケーションをとることで、ピア・サポートがどのような組織であるかを伝え、今後気軽に訪れてもらえるようにすることを目指す。さらに、北大入学を控える高校生にとっては、本活でピア・サポートを知ったことにより、進学してからも気軽に利用できるきっかけとなる。地域の人々にもピア・サポートの存在を知ってもらい、今後地域を交えた企画へのきっかけづくりになることを期待したい。

④ピア・サポーターの経験値向上とピア・サポーター同士の交流促進

ピア・サポーターは、研修を積んでいるとは言え、ピア・サポート対象者に対する傾聴経験が多いとは言えない。本活において、参加する人々と積極的にコミュニケーションを図ることで、ピア・サポーターとしての経験値を向上させることができるであろう。さらに、高校生と交流することで、大学生活にどのような不安を抱いているのかをあら

かじめ知ることができ、今後のピア・サポートの運営がより円滑になる情報が得られる。また、現在のピア・サポートの運営体制は、全員が集まって意思疎通を図ることができにくい状態にある。一つの企画を団結して作業することで、ピア・サポーター同士の交流を促進し、今後の運営のさらなる円滑化を望める。

これら4点が当初の目的であったが、実際に実施したイベントでは、北大生のための参加となった。ピア・サポートにとって初のイベント企画ということもあり、まずは学内に絞ってピア・サポートの存在を広めるべきだと関係者から助言を受けたためである。そのため、これらの目的のうち、地域住民や高校生との交流に関する部分は実現されず、今後の課題として残されることとなった。そして、北大生の大学生活に対する考えを掴むことが目的の一つとして追加された。今後のピア・サポート運営に向けて、大学生活において力を注ぎたいことや不安なことをあらかじめ知っておくことで、相談者を迎えた際のより良い対処の方法を検討できるためである。

以上、「学生間の学術的な引き継ぎを行う」こと、「本への興味・関心を喚起する」こと、「ピア・サポートの広報をする」こと、「ピア・サポートの経験値向上・交流促進」、「北大生の大学生活に関するデータを得る」ことの5つを開催の目的とした。

3. 3. 2. 本活のシステム

本項では、本活の詳しい内容について説明する。本活は、不要になった本を学生から集め、一定期間を置いて学生に配布するイベントとした。回収と配布の二部構成になっている。回収する本は、教科書、学術書、一般書とし、漫画や雑誌類は「学術的な引き継ぎ」という本活の目的に沿わないため受け取らないことにした。また、学生が不要となった本を中古本販売店へ持ち込むことができる環境の中、本活に参加してもらうには、本活に参加するインセンティブが必要となる。そのため、持ち込んだ本の値段や冊数に応じて、ノートやクリアファイル、ペン、USBメモリ（2GB・8GB）など、今後の研究や学習、実生活に役立つ品と交換することとした。

頒布する際には、単に本を配るだけでなく、できるだけピア・サポーターが来室者に話しかけるなどして、交流を持てるようにした。また、欲しい本が決まった学生はピア・サポート室内に誘導し、そこでアンケートの記載を依頼した。アンケートには、学年・学科・性別の他、「本を選んだ理由」など本活に関する質問、「学生生活で力を入れたいこと」や「学生生活での不安」というピア・サポート自体の活動に関する質問を設定した。

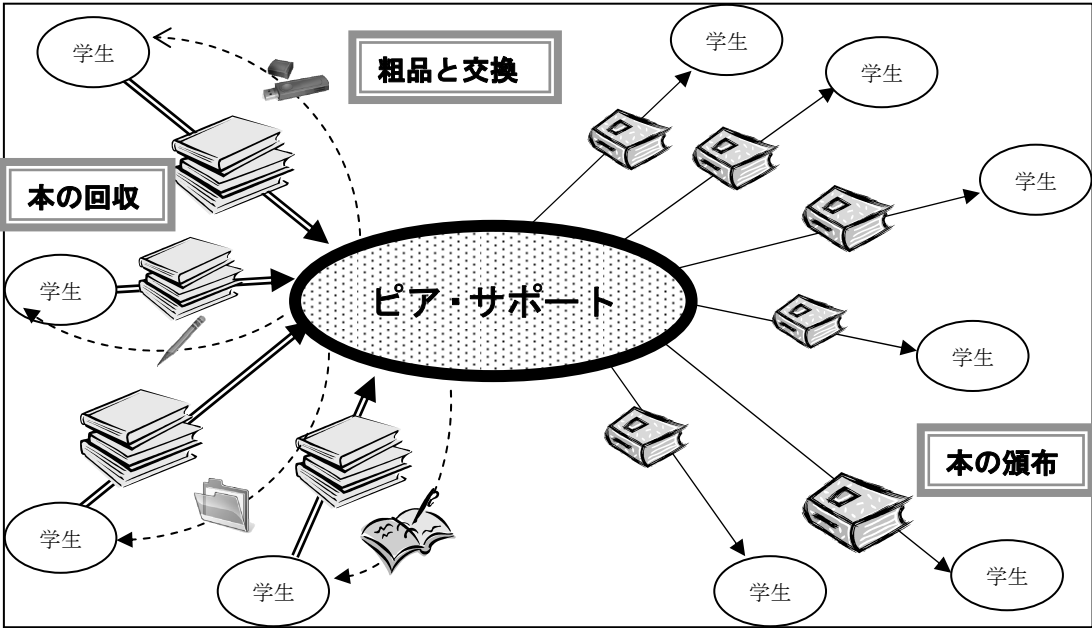


図 1 本活の流れ

3. 3. 3. 実施に向けての流れ

当初は、実施に向けて、以下のような計画を立てていた。

表 4 当初の計画

2010 年 1 月	2010 年 2 月	2010 年 3 月
受け渡し場所の確保		
本回収の告知		
本の回収・保管		
	本の仕分け作業	
	頒布場所の決定	
	頒布の告知・広報	
		頒布開始

当時ピア・サポートは、ボランティア室を週 2 回間借りして活動していた。そのため、本の受け渡し場所はボランティア室以外の別の部屋を借りることを考えていたが、最終的には、回収した本や回収の際に渡す品をボランティア室に置かせてもらえることになり、ボランティア室とその周辺の空間で実施することとなった。

以下は、実際に行った本活の流れである。

表 5 実際の流れ

1 月	2 月	3 月	4 月
構想（交換品の種類決定・広報案を出し合うなど）			
	2/10 ぴあのわ報告会内で先生方に本活企画内容提案		
	2/16～2/20 回収用告知のビラ配り・ポスター掲示		
	2/22～2/24 第一次回収	3/23～3/26 第二次回収	4/5～4/8 第三次回収
			4/12 頒布用告知のビラ配り・ポスター貼り替え
			4/12～4/16, 20, 22 頒布

実際は予想以上に構想に時間を費やし、先生方への企画提案が 2 月に入ってから行われるなど、計画よりも遅れて実施されることとなった。2 月 10 日に先生方や事務の方々からの了承を得、2 月の中旬には早速本活の告知を行った。告知開始から 6 日後には、本の回収を開始した。作業を急いだのは、学生が春休みに帰省する前に本活に参加してもらうためであったが、結果として定期試験後しばらく経過した時期になってしまった。この点は、反省点として挙げられる。3 月の末には、再度卒業後に引っ越す学生などを対象に回収作業を行い、4 月の頭にも念のためもう一度回収期間を設けた。頒布に関しては、教科書なども扱っていたために、各々始業から 2 回目の授業には間に合うよう 4 月の第 2 週を中心に行った。

以上のように、本活は回収から頒布まで 3 カ月間かけて行ったイベントであり、構想を含めると平成 21 年 12 月から翌年 4 月まで計 5 カ月間を要した。

3. 4. 「本活」開催の内容（平成 22 年度）

3. 4. 1. 本の回収について

①回収のための告知

本の回収を行うために、まずは本活自体の内容説明とその回収期間に関する広報をする必要があった。計画当初は地域住民や高校生も対象としていたため、地元新聞社やテレビ局にも取り上げてもらうという意見も挙がっていた。しかし、対象を学内のみとし

たため、広報活動は学内へのポスター掲示と学生へのビラ配りが主となった。以下は、そのポスターとビラ（ポスターを白黒印刷したもの）である（図 2、図 3）。実際に掲示したものは、回収日の日時に一部変更を加えている。ポスターには、不要になった本を文房具と交換できる旨の他、本の頒布時期の予告やピア・サポートの簡単な説明を記載した。

ポスターは 2 月 16 日に、教養棟とクラーク会館、全ての学部棟に掲示し、広く学生の目に留まるようにした。また、ビラ配りは 2 月 16 日から 20 日の 5 日間、中央食堂、北部食堂、工学部食堂を重点的に昼と夕方の 2 回ずつ行った。告知を始めたのは春休みに入ってからであったが、このポスター掲示とビラの配布は予想以上の効果があり、回収時期には多くの学生がボランティア室(旧ピア・サポート室)を訪れることとなった。

ピアサポート学生生活活性化企画

～本 活～

いらなくなった本や教科書、参考書があれば、是非お持ちよりください。
 (マンガ・雑誌等、一部引き取りができないものもありますが、ご了承ください。)

協力してくださった方には、冊数・金額に応じて
 もれなく粗品をプレゼントいたします。

★粗品例★
 1冊以上…ペン、クリアファイル
 10冊以上…USBメモリー などなど

回収場所：ボランティア室 (高等教育機能開発総合センター N109)
 回収日：3月16日～30日の(火と木) 14時～16時30分
 4月 5日 (月)～ 9日 (金)
 月・水・金11時～15時、火・木11時～17時

※「ピアサポート」とは…
 学生の、学生による、学生のためのサポート活動です。
 学生生活の悩み、疑問を一緒に解決します。

《予告》今回回収した本は、4月12日～16日にボランティア室
 にて無料で頒布します。探してた本が見つかるかも！！ピアサポート学生委員会
 連絡先：011-706-7434 (高知館センター学生支援課) hokkaidu@gmail.com (ピアサポート学生委員会「本活」担当)



ボランティア室

図2 本活 2010 回収用ポスター①

卒業する方、引っ越しする方

朗報です!

いらなくなった本や教科書、参考書があれば、
 是非お持ちよりください。
 (マンガ・雑誌等、一部引き取りができないものもありますが、ご了承ください。)

協力してくださった方には、冊数・金額に応じて
 もれなく粗品をプレゼントいたします。

★粗品例★ 1冊以上…ペン、クリアファイル
 10冊以上…USBメモリー など

回収場所：ボランティア室 (高等教育機能開発総合センター N109)
 回収日：3月16日～30日の(火と木) 14時～16時30分
 4月 5日 (月)～ 9日 (金)
 月・水・金 11時～15時
 火・木 11時～17時

※「ピアサポート」とは…
 学生の、学生による、学生のための
 サポート活動です。学生生活の悩み・疑問を一緒に解決します。

《予告》今回回収した本は、4月12日～16日にボランティア室にて
 無料で頒布します。探してた本が見つかるかも！！
 ピアサポート学生委員会
 011-706-7434 (高知館センター学生支援課) hokkaidu@gmail.com (ピアサポート・「本活」担当)



ボランティア室

図3 本活 2010 回収用ポスター②

②回収

前述にもあるが、平成 22 年度本活における本の回収は 3 期に分けて行われた。1 回目は、春休みに実家へ帰る前の学生を対象に 2 月 22 日から 24 日の 3 日間、それぞれ午前 11 時から午後 17 時までであった。2 回目は、引っ越しをする学生を対象に卒業式前後の 3 月 23 日から 26 日の 4 日間で、それぞれ午後 14 時から 16 時半までであった。そして 3 回目は、最後に念押しの意味も込めて 4 月 5 日から 8 日の午前 11 時から 17 時まで行った。

以下は、回収の際に受け入れる本と受け入れられない本の分類表である。

表 6 本の受け入れ基準表

受け入れる本
教科書・参考書・学術専門雑誌・文庫本・新書・辞書・図鑑・論文集・学会誌・画集
受け入れない本
漫画・ファッション雑誌・TV ガイド・その他娯楽系雑誌（ゲームやパズル・旅行等）・絵本・生活情報誌・カタログ

「学術的な引き継ぎ」という狙いがあるため、漫画や雑誌類は原則的に受け入れないこととした。また、受け入れるべきか迷った際は、北大生協にて取り扱いがあるか否かを判断材料とし、生協に置いていない類の本は受け取りができないことにした。しかし例外として、高校時代の教科書は、求めている学生がいる可能性も考慮して、引き取ることにした。

持ってきてもらった本と交換する品は、元の本の値段と冊数に応じて内容を設定した。本の値段が 1000 円未満のものは 1 冊 1 ポイント、1000 円以上のものは 1 冊 2 ポイントとし、合計ポイントを自由に組み替えて交換できるようにした。以下は、物品の種類をポイントごとにまとめたものである。

表 7 粗品の交換レート表

1 ポイント	ペン、クリアファイル
5 ポイント	レポートパッド
10 ポイント	洗剤、ティッシュペーパー
20 ポイント	USB メモリ (2G)
40 ポイント	USB メモリ (8G)

自由に組み替えて、というのは、例えば 20 ポイント分を持ち込んだ学生は必ずしも

USB メモリ（2G）と交換する必要はなく、ペン 5 本、クリアファイル 5 枚、レポートパッド 2 冊との交換ができるということである。計画当初は、これらの品の他に、図書券（500 円分と 5000 円分）やハードディスク（100 ポイント用）なども候補に入っていたが、金銭の授受と見なされるものや、部屋の備品として判断されるものは、本活の交換品候補からは外されることとなり、実現できなかった。

さて、3 期に分けて計 11 日間で行った回収の結果、集まった本の合計は 492 冊であった。期間ごとの内訳は以下の通りである。

表 8 回収冊数

月	冊数
2 月	1 7 6 冊
3 月	1 1 7 冊
4 月	1 9 9 冊
計	4 9 2 冊

念の為に行った 4 月の回収で、最も多い 199 冊を回収した。次に多く集まったのは 2 月の 3 日間であり、3 月の 4 日間には計 117 冊が集まった。回収された本の中では、参考書が最も多かったように見受けられ、とりわけ資格取得用の本が目立った。その他は、教科書や文庫本が主であった。この結果から考えると、4 月に回収期間を増やしたのは、効果的であったと言える。

今回の本活では「学術的な引き継ぎ」という目的を大きく挙げていたにも関わらず、どのように本を使用していたのか、授業でどう活用したか、本を通してどのような刺激を受けたかなど、本を通した体験談を、我々は記録として集めてはいなかった。本来これらは、研究室やサークルなどで先輩から本を引き継ぐ際に得るであろう情報なのだが、本を通して学生をつなぐ本企画において、これらの情報を引き継ぐことができなかったのは、反省点として挙げられる。

3. 4. 2. 本の頒布について

①頒布のための告知

本の頒布に向けて、回収告知と同様にポスター掲示とビラ配りを行い、さらに新入生に配布する「クラスオリエンテーションパック」（以下「クラオリパック」）にもビラを入れた。本活の目的の一つには、組織されて間もないピア・サポート自体の広報も含まれていたため、重点的に新入生への広報活動を行うためである。ポスターはこれまで回収用に掲示していたものを頒布用に貼り替えたのみであったが、ビラ配りに関しては、新入生が多く利用する教養棟を中心に行う事とした。当初は、ビラ配りの期間を本の頒布初日から一週間程度を計画していた。しかし、初日から予想以上に多くの学生が訪れ、

多くの本を頒布したため、本の残り冊数を考慮に入れた結果、残り 6 日間のビラ配りは中止となった。以下の図は、頒布告知のために使用したポスターである。

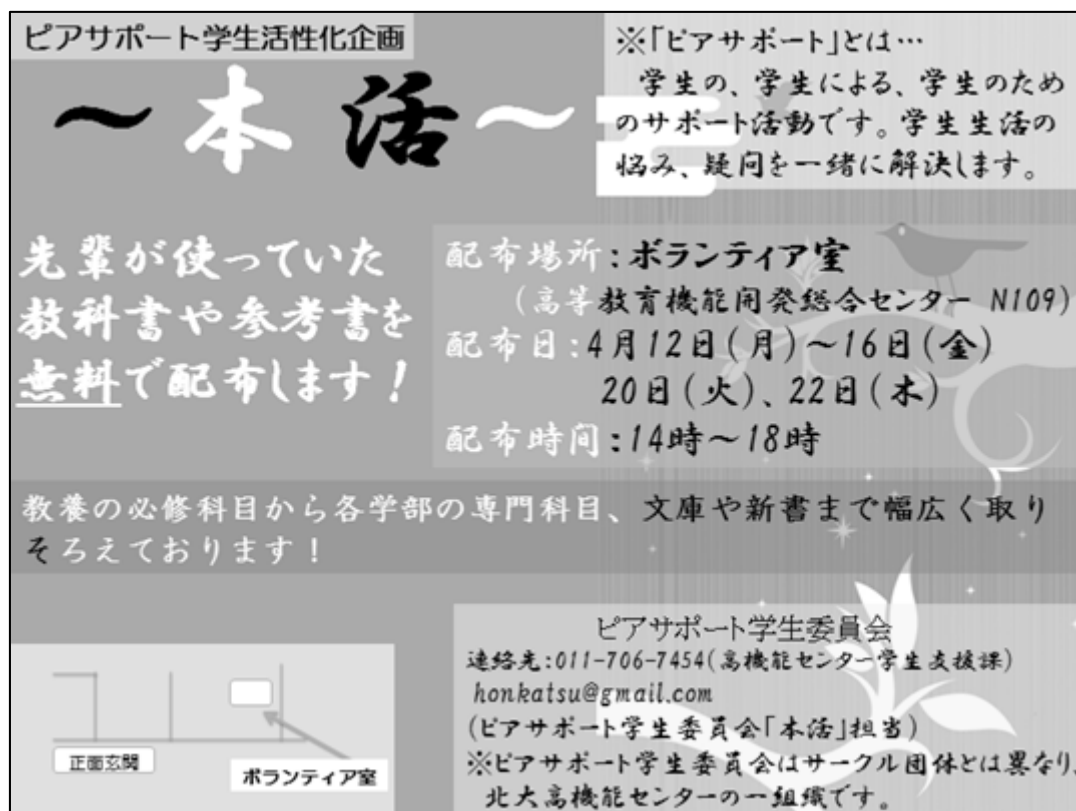


図 4 本活 2010 頒布用ポスター

これらの広報活動の中で、どの媒体が最も効果的であったのだろうか。学生が本を受け取る際に記入を依頼したアンケートによると、本活に参加するきっかけとなった情報媒体は以下の通りとなった。

表 9 本活に参加するきっかけとなった情報媒体

紙媒体	1 2 8	
	クラオリパック	2 4
	ポスター掲示	2 5
人づて	5 6	
たまたま通りかかった	1 2	
不明・その他	1 1	

アンケートを自由記述式にしたことから、複数の媒体を挙げている学生もいるため、上記の合計人数はアンケートの合計数（202 枚）とは一致していない。また、「チラシ」

「ビラ」「プリント」などの紙媒体を指す回答が 128 人と最も多かったが、これらがクラオリパックに封入したビラや配布したビラ、ポスターの内どれを指しているのかは判別がつかなかった。「クラオリパック」、「ポスター」と明記されていたものは、128 人中それぞれ 24 人、25 人であった。また、人づてに聞いて本活に参加した学生は 56 人いた。具体的には「友達に聞いた」、「ピア・サポーターから直接教わった」などの回答である。偶然通りかかった人は 12 人、無回答や回答内容が不明のものは 11 人であった。

この回答傾向から、以下の 2 点の考察を行うことができる。1 点目は、紙媒体、特にクラオリパックやポスター掲示の果たした役割は重要であることだ。クラオリパックは、サークルや部活の紹介が入っているため、新入生が大学生活に期待する情報を得られるものである。その中に、本活の案内を入れたのは、大きな効果があったと見られる。また、ポスター掲示についても、学内の教養棟を含めた全学部に、正式にイベント内容を説明し、掲示板に貼っていただけたのが良い影響を及ぼしていると考えられる。新入生歓迎期には、サークルや部活のための掲示板は、ビラ貼り合戦とも言うべき状況になり、多大なコストを強いられることとなり、新入生の中には、そうした状況に辟易し、掲示板自体を見ない場合もある。それに比べて、大学の正式な掲示板であれば、事務職員の許諾が無ければポスターを貼ることが出来ないため、そのような混乱状態には陥らず、新入生にとって、情報取得のためのメディアとして機能すると考えられる。2 点目は、「人づてに聞いて」という回答が多いことから、本イベントは、「人に伝えたいイベント」であったことが伺えることだ。特に、今回は利用者側から見ると、無料で本がもらえるイベント、であり、サービスを受けた学生が、その他の学生に対して当該イベントのことを伝えた可能性が高い。このように、人に伝えたい内容のイベントを開催することも、イベント広報に一役買うことが考えられる。

②頒布

本の頒布は、4 月 12 日から 16 日、20 日、22 日の計 7 日間行った。本を持ち帰る人にはアンケートの記入を条件とし、回収したアンケートの枚数が 202 枚であった。来訪者数は約 400 人であると算出された。アンケート回収数の約 2 倍という形で算出したものである。実際にイベントで学生対応を行ったピア・サポーター数名に、体感で何割程度の学生が本を持ち帰ったか、を問い、その最小値である 50%を採用した。最大値は 70%であった。その結果、最低 400 人は来場したという結論をだした。

それでは、日別のアンケート回収数の推移はどのようなになっているだろうか。以下のグラフは、アンケートの回収枚数をまとめたものである（図 5）。

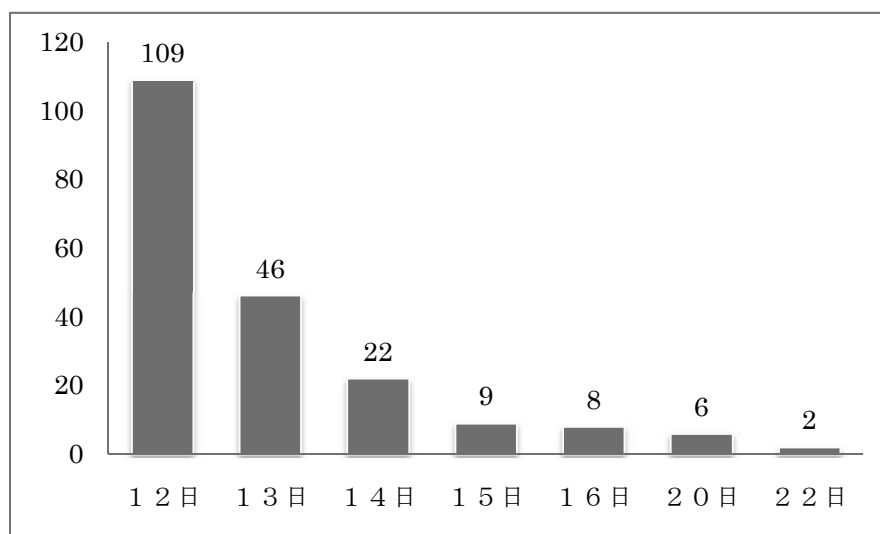


図5 日別のアンケート回収数

回収できたアンケートの数（=本を持ち帰った学生）202中、初日が109と半数以上を占めた。これを理由に、頒布のためのビラ配りを中止した。2日目には46、3日目には22と、徐々に回収枚数が減少している。以下は、回収したアンケートの学年別グラフである。

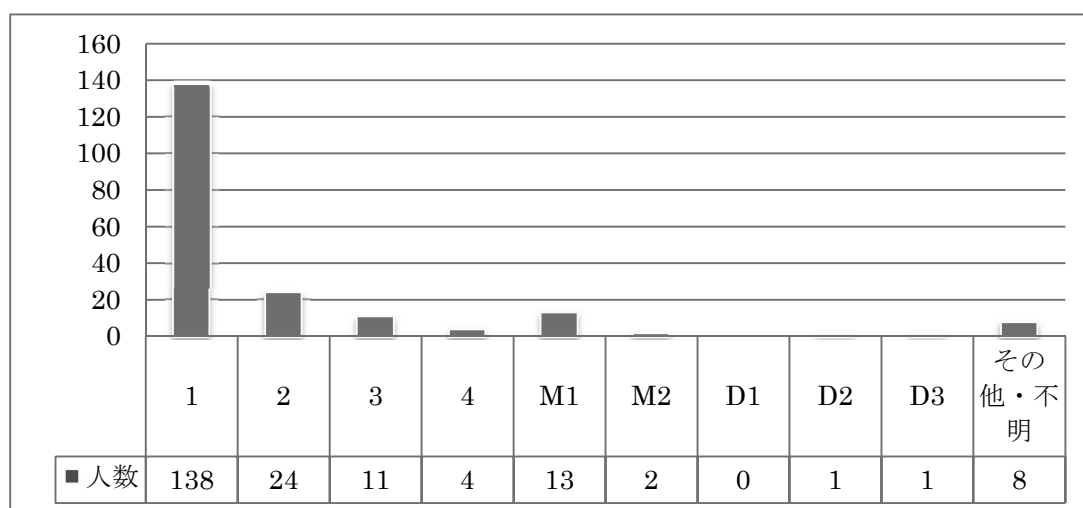


図6 学年別アンケート回収数

参加学生を学年別で表したところ、学部1年生が最も多く、138人であり、学部2年生が24人と続いた。ビラ配りを行った教養棟は学部の1、2年生が主に使用する建物であるが、1、2年生の参加の割合に大きな差があることから、1年生のみに配られるクラオリパックによる宣伝効果が大きかったことが推測される。

次に頒布冊数について見てみたい。以下は、日別に頒布冊数を表したものである。

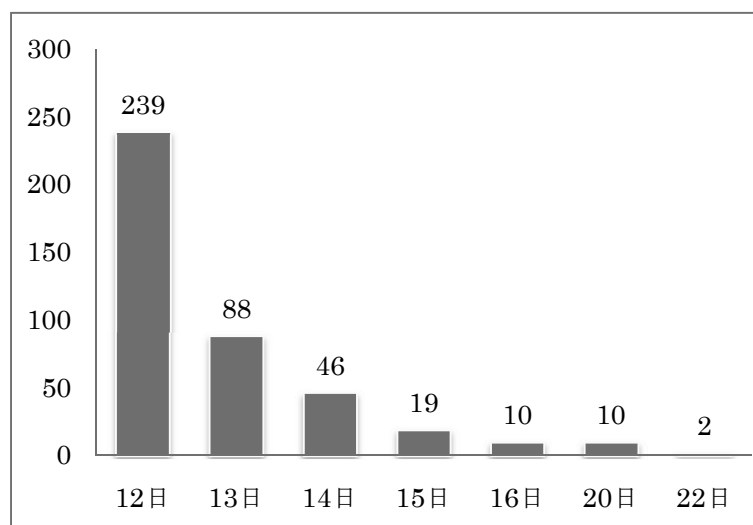


図 7 日別の本の頒布冊数

最も多くの学生が来訪した初日に、全体の 58%に当たる 239 冊の本が頒布された。2 日目には 88 冊、3 日目には 46 冊が持ち帰られ、全日で計 414 冊を頒布した。回収冊数が 492 冊であるので、回収した本の約 85%を頒布したことになる。残りの本は、ボランティア室（旧ピア・サポート室）に保管した。

本を持ち帰った学生へアンケートを行ったところ、本を選んだ理由は主に以下の 4 種が目立った。

表 10 本を選んだ理由

・授業で必要な教科書だから
・今後専門分野の参考になりそうだから
・語学や資格の勉強のために
・文庫本や新書の内容に興味があったから

教科書類は頒布の初期に、ほぼ無くなり、授業・研究用の書籍が強く求められていることが明らかになった。中には、新たに必要となる教科書のリストを持って本活に来る学生もあり、我々が予想した以上に、教科書を求めている学生の姿が多かった。教科書を求めて訪れた学生にヒアリングを行ったところ、経済的事由により、教科書の費用を節約したい、という意見が聞かれた。ただ、一方で、飲み会の費用や携帯電話料金、趣味に使うことにあてたい、といった意見も聞かれた。つまり、教科書に対して金銭をかけることは節約しても、交際費や趣味にかかる費用は確保するということである。このことは、学生が大学での学習や教育について意欲を持ってない、という側面も表していると思われ、今後の本活で、ピア・サポートが解決すべき事象となる可能性がある。



図 8 本活 2010 頒布の様子



図 9 本活 2010 頒布の様子

(左端のジャンパーを着ているのがピア・サポーター)

③その他アンケート結果

学生に記入を依頼したアンケートでは、本活に限らず学生生活全般についても尋ねた。質問内容は、「学生生活で力を注ぎたいこと」と「学生生活で不安なこと」の2種類である。以下、それらの結果を述べる。

表 11 学生生活で力を注ぎたいこと

内容	人数	割合
学習面(研究・単位・語学)	127	62.9%
課外活動(部活・サークル)	62	30.7%
アルバイト	16	7.9%
読書	7	3.5%
生活	5	2.5%
資格取得	3	1.5%
その他	46	22.8%
無記入	13	6.4%

表 11 は、参加学生が自由記述で記した「学生生活で力を注ぎたいこと」の回答をまとめたものである。複数の回答をした学生もいるため、それぞれを合計しても 100%にはならない。

「力を注ぎたいこと」として最も多く挙げられたのは、学習面に関すること（全体の約 63%）である。「勉強」、「学会や研究」、「授業」、「単位を取ること」、「法律学」という回答の他に、「外

国語をたくさん勉強して簡単な会話ができるようになりたい」など授業以外の学習面についても挙げられた。次に多かったのは課外活動に関することで全体の約 30%が挙げていた。ただし、サークルを挙げた人の多くは、「勉強・サークル」、「学業とサークル」、「①勉強 ②サークル ③バイト」というように他のもの、特に学業と共に記載していた。次に多かったのは、アルバイトに関する記載である。これに関しても、「学業・サークル・アルバイト」、「まずは必要な単位をとる。バイトを多めに入れて貯金する」など、他のものと共に記載されている回答が多かった。また、全体の 22.8%が回答した「その他」は、具体的には「人脈作り」や「好きなこと」、「北大でしかできないこと」などが挙げられている。

表 12 学生生活で不安なこと

内容	人数	割合
学習面	58	28.7%
生活全般	32	15.8%
金銭	17	8.4%
進路	15	7.4%
大学生活	14	6.9%
人間関係	12	5.9%
その他・不明	27	13.4%
ない(「なし」と明記)	20	9.9%
無記入	22	10.9%

「学生生活で不安なこと」についても、表 12 に整理した。表 11 と同じく、複数回答した学生がいるため、合計は 100%にはならない。

「学生生活で不安なこと」に関しても、学習面を挙げる学生が最も多く、全体の約 29%であった。具体的には、「勉強」、「学業」、「授業についていけるかどうか」という回答の他に、「大学の勉強につい

ていけるかどうかが不安です」「オリエンテーションで単位をとれない人が多いと驚かれたので、それが心配」と、高校とは違った授業形式に不安を覚えている例が見受けられた。次に多かったものは生活全般に関する内容で、全体の約 16%の学生が挙げている。具体的には、「自炊での生活リズムの組み立て」や「生活リズムが崩れそう」、「生活が乱れやすくなること」という大学生活における生活リズムの問題や、「人間関係と慣れない土地での生活とか」、「一人で勉強も生活もやっていけるか」、「部屋探しがうまくいなくて通うのがつらい」という新生活への適応に関するものなどが挙げられた。次に多かったものは金銭に関する内容である。具体的には、「食費」「金欠」「お金が続くか。金銭面での心配大」という回答が挙げられた。

これら二つのアンケート結果を通して、多くの新入生が学習面に力を注ぎたいと考えており、また一方で不安も抱いているということが明らかになった。本活中、教科書や参考書類がまず持ち帰られたことから、これらの要素が見てとれる。このように学習面に対する期待や不安を多くの学生が持っているのであれば、先輩からの本を引き継ぐことができる本活は、北大生の需要に合った活動だったと言えるだろう。学生の学習面のサポートは、大学ではアカデミックサポートが請け負っている。しかし、大学の授業に関する情報や在学生からのアドバイスの提供など、我々ピア・サポートからも本活を通して学生をサポートできる面があるはずであり、今後の展開に生かしていきたい。

3. 5. 平成 22 年度本活の振り返り

3. 5. 1. 成果と反省点

計画を立てた期間を合わせると、のべ 5 カ月間に渡って行われた平成 22 年度「本活」は、我々の予想以上に盛況なものとなり、学生から多くの意見を聞くことができる貴重な機会となった。特に、ピア・サポーター達は本活を行いながら積極的に学生たちに話しかけることを心がけ、学生生活のちょっとした不安を聞いたり、教科書や本に関する話を聞くなど、様々な立場の学生とコミュニケーションをとることができた。組織されて間もなく、相談者数の少なさが問題とされていた中で、たとえ世間話であっても多くの学生と会話することは、ピア・サポーターとして傾聴の良い経験になったと言える。そして、本の回収や頒布を通して 400 人を超える学生がボランティア室（旧ピア・サポート室）を訪れたことから、ピア・サポート自体の広報としても本活は大きな成果を挙げたと言えよう。後述するが、さまざまな大学のピア・サポートが集まる「びあのわ」で本活について報告を行ったところ高い評価を得た。このことから、ピア・サポートが行った学内のイベントとして「本活」は比較的成功したものであると判断できる。

ただし、もちろん課題を見出すことができる。第一に、情報の錯綜である。たとえば、告知ポスターの内容に誤りがあった。ポスター内の実施日や地図に関する問題点の指摘を関係者から受けて初めて気が付いたのである。企画から実施までの期間が短かったこ

とが原因として考えられるが、多くの学生がピア・サポートを知るきっかけとなるイベントであるため、ピア・サポーター内でのチェックを強化するなどして、細かい点でも信用に関わる誤りは避ける必要があった。第二に、本の回収の際にもアンケートを行うべきであったことが分かった。前述したが、単に本を引き継ぐだけではない点が本活の重要な点である。学習面や授業に関するアドバイスなどの情報も、本活を通して学生に伝える必要性を感じたため、次年度からは本の回収時にもアンケートを行い、様々な情報をピア・サポート室に蓄積し、利用学生に公開していきたい。第三に、教科書を求めて訪れる学生が予想以上に多かった点が挙げられる。本活を行う目的の中には学術的な引き継ぎがあり、教科書を求めて利用学生が訪れることは想定をしていたものの、予想以上に教科書のニーズが高かった。配布一日目は、時間前に利用学生の行列ができていたほどである。今回、新入生のニーズとして教科書を得ることがあることが明らかになったが、今後本活を続けるにあたって教科書の取り扱いの増加を考えると、本来教科書を販売している大学生協の書籍部や関係者のことを考慮に入れる必要が出てくる。我々の目的は、「本を無料で配布すること」には無いため、今回の反省を生かし、より良いやり方を模索していく必要があることを実感した。

以上の三点を、主な反省点や課題として挙げつつ、平成 22 年度の本活は終了した。

3. 5. 2. 本活に関する報告の実施

我々は、平成 22 年 8 月のピア・サポート報告会と平成 23 年 1 月の「ぴあのわ」にて、各関係者に「本活」の報告をおこなった。前者の報告会は、常日頃ピア・サポートを支えて下さっている先生方や学生支援課の方々を対象に、組織されて約 1 年が経過したピア・サポートの現状を報告するための会である。この報告会では、本活の手応えを述べ、来年度も本活の継続を希望する旨を伝えた。後者のぴあのわは、さまざまな大学のピア・サポーターが集まり、活動報告を行う会議である。本活に関して報告をしたところ、各大学のピア・サポートでも今までにない取り組みであり、興味深いとの反応を得た[※]注。

3. 6. 再び本活の開催へ

先生方や学生支援課の方々へ向けたピア・サポート報告会を終えてから 2 カ月後の 2010 年 10 月、ピア・サポートで再び本活を開催することが決定した。ピア・サポート室を移動し、本棚を備え付けた部屋を新たに得たため、本棚を活用した本活をしようと提案された。しかし、開催にあたって大きな問題となるのは、先の課題にも挙げた教科書の問題である。学生の多くが教科書の引き継ぎを希望している一方で、大学には当然教科書を販売する機関が存在している。教科書の頒布をこのまま続けるのは望ましい方向ではないと思われた。そこで、一度ピア・サポートでは、北海道大学の生協書籍部に

これまでのピア・サポートの活動を報告し、本活を行うに当たって教科書の取り扱いについて相談をした。生協書籍部は、通常の書店とは異なり、単に学生へ向けて物を販売するのではなく、学生の便益を重要視している機関である。そのため、本活の理念に対しては賛同の意を頂戴し、教科書販売の際にピア・サポートのチラシや本活のチラシを置いていただけることなど、協力的な提案をいただいた。

しかし、教科書の取り扱いに関しては、今後このまま本活を継続するといくつかの問題を引き起こすことが指摘された。その一点目は、教科書の在庫が多く残ってしまう点である。教科書を購入する学生が減少すると、余った教科書が生協の書店から問屋へ返品される。それが何度も繰り返されることにより、今後発注通りの数量が問屋から生協に届かなくなる可能性がある。本活は、それを助長する可能性を持っているのである。結果的に本の仕入れが少なくなると、学生にとっても買いたい本が買えないという不利益が生じてしまう。二点目としては、先輩から引き継いだ本の場合、版が違くと教科書の内容自体が変更されている可能性が挙げられた。授業や試験の際に内容が違う事が判明し、新たに生協で購入を試みても、時期によっては取り扱いされていない場合がある。やはり、教科書の頒布を本活で続けると、結果的には学生のサポートにならない恐れが出てくるのである。

以上の点から、平成 23 年度の本活は前年度と理念は同じくしながらも、内容を変更することとした。変更点は以下の 4 点である。

①告知の方法

本活の告知をするにあたって、平成 23 年度はビラ配りを廃止した。ポスターに関しては、前年同様、各学部棟や教養棟で掲示を行い、その他新ピア・サポート室の内外にもポスターの掲示を行う。

②本の頒布を行わない

平成 22 年度の本活では本の無料頒布を行ったが、平成 23 年度ではあらゆる本の頒布を行わないこととした。理由は、前述の通り生協書籍部への影響と、結果的にそれに伴う学生への影響を考慮したためである。回収した本は全てピア・サポート室のオープンスペースに設置された本棚に置かれ、ピア・サポートの活動時間は誰でも自由に閲覧できることとした。

③本に関する情報提供を積極的に行う

平成 23 年度の本活では、本そのものの譲渡を廃止した代わりに、本に関する情報提供を積極的に行うこととした。前年度の反省点を活かし、本の回収の時点で学生にアンケートを依頼し、教科書の使い方や、参考書の活用法、文庫本の感想や推薦点などの情報を収集する。これらの情報をまとめ、本棚に並べた本と共に提供できるようにする。

④共同購入

生協では、同じ本を 10 冊購入することで割引が発生する共同購入という仕組みがある。生協での教科書購入を促進すべく、ピア・サポートでは共同購入の案内を行うこと

とした。共同購入については、平成 23 年 2 月現在、4 月の教科書購入の時期に向けて、検討中である。

3. 7. 本活開催中の内容（平成 23 年度）

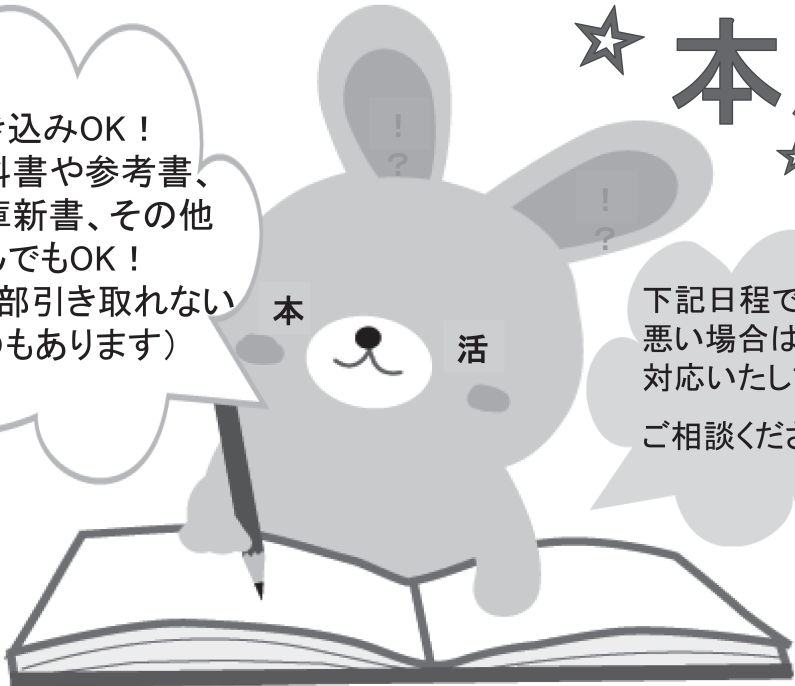
3. 7. 1. 回収のため告知

本項では平成 23 年 2 月現在、すでに進行中である本活の内容を一部報告する。回収のための告知は、前年度の反省を踏まえ、1 月中旬と早い時期から行っている。方法としては、前述の通りビラ配りを廃止し、各学部棟、教養棟、ピア・サポート室前と室内にてポスター掲示を行っている。また、ピア・サポートの活動時間には、学生が自由に持って帰れるよう部屋の入り口に本活に関するチラシ（ポスターを縮小コピーしたもの）を設置した。新ピア・サポート室は北図書館に近く、オープンスペースも設けているため、本活のポスターがより多くの人の目に留まるようになっている。以下に、平成 23 年度の本活における本の回収のためのポスターを示した（図 10）。平成 22 年度のポスターと違う点は、平成 23 年度のポスターはピア・サポート自体の説明を省略し、本の回収に関する詳しい説明を行っている点である。

書き込みOK！
教科書や参考書、
文庫新書、その他
なんでもOK！
(一部引き取れない
ものもあります)

☆ 本活 ☆ ☆

下記日程で都合が
悪い場合は個別に
対応いたします。
ご相談ください！



あなたの不要な本を種類・冊数などに応じて
素敵な粗品と交換いたします。(文房具、USB等)
集めた本はピア・サポート室にて後輩が閲覧でき
る資源となります。

● 収集期間 1/17～3/30(祝祭日除く)
 月、水、金 14:00～18:00
 (ピア・サポート室開設時)

● 収集場所 情報教育館2Fピア・サポート室(北図書館隣り)

● 連絡先 Tel (011)706-5350 ピア・サポート室
 E-Mail honkatsu@gmail.com

ピア・サポート学生生活活性化企画

図 10 本活 2011 回収用ポスター

3. 7. 2. 回収

今年度は、集中したイベント期間を設けず、ピア・サポートの通常業務の時間帯（毎週月・水・金曜日の14時から18時）に本活も並行して行うこととした。本の回収は1月17日から行っており、今年度からは高校時代の教科書は取り扱わないこととなった。

交換する粗品は、前年度と同様である。

回収された本は1月中（ピア室開室日は7日間）は150冊、2月中（ピア室開室日は10日間）は370冊であり、2月末の段階で520冊に上っている（表13）。

表13 平成23年度本活の本の回収数

月	回収日数（ピア室開室日）	冊数
1月	7日間	150冊
2月	10日間	370冊

4月上旬まで回収を続ける予定であり、前年度を上回る冊数が集まることが予想される。

回収の際、前回と大きく異なる点は、アンケートの記入をお願いする点である。このアンケートは3種類あり、うち2種類は本に関するもの、1種類は学生生活に関するものである。本に関するものは教科書用と文庫・参考書用に分かれており、教科書用のもは授業での活用や使い方のアドバイス、文庫・参考書用は感想や推薦点を記入してもらうようになっている。もう一方の学生生活に関するものは、我々ピア・サポートの通常業務で参考にするためのもので、記入してもらった場合にはさらに2ポイント付与することとした。学生生活に関するアンケートの内容は、「学生生活を送るなかで悩んだこと・困ったこと」「悩みを解決するために起こした行動」「大学生活を振り返った感想」「新入生へのアドバイス」の4問である。これら3種類のアンケートを今後の本活とピア・サポート通常業務に役立てる予定である。2月末現在、教科書に関するアンケートは28枚、参考書・文庫本に関するアンケートは32枚、学生生活に関するアンケートは14枚集まっている。

アンケートの利点として、上記だけでなくピア・サポーターと本を持ち込む学生とのコミュニケーションの創出が生まれている。ピア・サポートの活動内容を説明するだけでなく、学生から新ピア・サポート室に対する意見や要望も聞かれた。また、交流を機に何度も足を運ぶ学生も増えている。本を受け取り、文房具を渡すだけのやり取りではなく、アンケートなどを媒介にして、会話をできるだけ行い、今後も気軽にピア・サポート室を利用してもらうことへと繋げていくことができる。

3. 8. おわりに

以上、本章では学生活性化イベント「本活」の平成22年度と平成23年度の一部の報告を行った。本活の理念は、ピア・サポーターが学生を繋ぐ役割を担うこと、学生間の学術的な引き継ぎを手助けすること、学生間の読書文化を広めることという点においては、この2年における変化はない。しかし、ピア・サポートにとって本活の役割は少々変化している。平成22年度では学生間に知名度がほとんどなかったピア・サポートを

周知するために行われていたが、平成 23 年度の本活は、前年の試みをさらに強化しつつ、ピア・サポートが、より人々のつながりを創出することに重点を置いて実施されている。平成 22 年度の本活では、主にピア・サポーターと学生がピア・サポート室を場として、本を媒介として交流することに力点をおいており、その試みはおおむね成功したと考えられる。ただ、それはあくまで学生同士のつながり強化にすぎなかった。平成 23 年度の本活では、生協の書籍部という大学関連組織を含めて、ピア・サポーターと学生のつながりを創出しようとするものに変化している（図 11）。

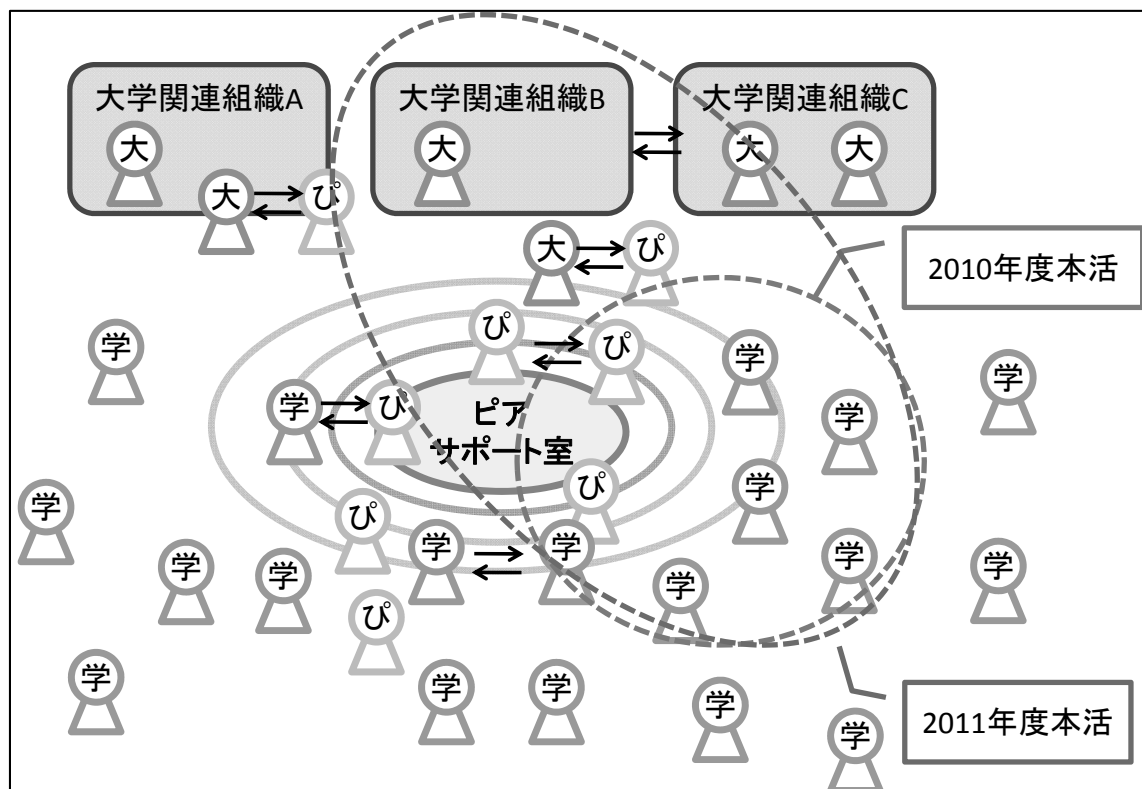


図 11 ピア・サポート室を中心とした本活によるつながりの創出図

発足から 1 年半が経過し、ピア・サポートは、学生の相談を取り次ぐ役割のみならず、学生と学生、学生とピア・サポーター、学生と大学内の各組織をつなぐという新たな役割を認識するようになってきている。その中で、積極的に学生とコミュニケーションを取り、生協など各組織と相談を行ってきた今年度の本活では、前年と違った新たな結果や手応えを得ることができていることが予想できる。

*注：岡本健(2011)「北海道大学ピア・サポートの新展開：つながり創出型ピア・サポートシステムの試み」『第 4 回 ぴあのわ（開催年月日：2011 年 1 月 8 日 於：名古屋工業大学）』発表用スライド

《ダウンロード URL》 <http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/44657>

